

欧米金融コングロマリットの形成と戦略の方向性

漆畑春彦（みずほ証券株式会社 経営調査部 シニアマネジャー兼上級研究員）

欧米で金融コングロマリットが形成された経緯や背景を整理しながら、最近の欧米金融グループにおいて、どのような事業再編が行われているのか、そこから読みとれる経営戦略の方向性を概観する。

例えば、米金融界では、長く特定の事業に経営資源を集中する「特化型戦略」が金融機関に相応しい戦略とされてきたが、1998年のドイツ銀行によるバランスシート買収、シティグループ誕生、そして、翌年のグラム・リーチ・ブライリー法成立を経て、金融機関の大型化や銀行の投資銀行参入など経営多角化が加速した。もともとユニバーサルバンク制でコングロマリット志向が強かった欧州勢との国際的な金融競争の拡大も、米金融界がコングロマリット化、巨大化に進んだ重要な要因と考えられる。

最近では、シティグループの生保・年金部門売却やモルガンスタンレーのカード部門スピンオフなど、米金融界のコングロマリット戦略が修正される動きが相次いで出てきている。このような金融機関の組織再編について、いくつかの個別ケースをとり上げながら、欧米金融コングロマリットが目指す戦略の方向性について、若干の分析に基づいて考察することとしたい。

【報告内容（予定）】

1. 欧米金融コングロマリットの形成の背景
 - (1) 規制上の要因
 - (2) 欧米間の国際金融競争
2. 欧米金融コングロマリットの事業再編と評価（ケーススタディ）
 - (1) 銀行を中心とした金融グループの戦略上の傾向
 - (2) 「銀行→証券」戦略の評価
 - (3) 「銀行→保険」戦略の評価
3. 金融コングロマリットの方向性について